

研究主題 **音声言語としての国語の指導**  
～基礎的技能の指導によって「話すこと・聞くこと」の意識を高める授業の研究～

要約：日頃の問題意識から、発声や話す速度など、音声言語の基礎的技能を学習課題とした授業のあり方について研究した。その上で、5つの基礎的技能を取りあげ、3つの留意点をもって実践授業をしたところ、相手の身になって話すこと、聞くことの大切さを意識づけることができた。

キーワード：基礎的技能（組み立て・速度と間・視線と相づち・発音・発声）、相手意識

## I はじめに

現在、学校現場の至るところで、生徒の話す力・聞く力の不足が問題となっている。仲間内でのおしゃべりは得意でも、公的な場での発言や発表となると、思うようにできない。一方、日常生活においては、感情に任せた物言いや職員室でのタメ口など、相手への配慮や話しことばへの自覚に欠けた姿が目につく。

音声言語は、文字言語とは異なり、ことばそのものが持つ意味以外の要素、例えば、声の大きさや調子、視線などが伝達情報として大きく働く。声によって届けられることばは、時に人を動かし、時に深く傷つける。消えてなくなるがゆえに、そこに配慮も必要となる。

まして、実社会においては、気心の知れた友人との関わりよりも、面識のない、立場も年齢も異なる人との関わりが圧倒的に多くなる。発することばの中身はもちろん大事だが、それを声に乗せ、「相手」に向けて適切かつ効果的に伝えようという、基礎的な部分での意識や技能が不可欠ではないだろうか。

そこで、私は、高校においても、発声や発音などの基礎的な学習が必要であると考えた。すべての基礎的技能は、「相手」の身になって初めて機能するものである。学習によって、ふだんは無自覚な音声言語に目を向けさせ、自己のあり方を振り返らせるとともに、「話すこと・聞くこと」における、「相手」への意識を高めることができるのではないかと思い、研究テーマとした。

## II 研究の目的

高校国語科における、音声言語の基礎的技能の

指導について、その方向性を探り、指導内容・指導方法、教材を具体的に検討し、実践授業を通してその成果と課題を明らかにする。

## III 研究内容

### 1. これまでの指導をめぐる課題

#### (1) その場限りの扱い

発声・発音、話す速度といった基礎的技能が中心的な学習課題として取り上げられることは少なく、指導はその場限りのものであることが多い。また、実際の言語活動の中では、多くの要素が絡み合うため、それが何のための学習か拡散しやすいという問題もある。

#### (2) 印象に頼る指導

音声言語は、その場で消えてなくなるため、自分ではなかなか自覚化、対象化できない。自分のあり様を客観的に評価しにくいいため、学習の実感が得られにくい。同様のことは指導する側にも言える。話す「内容」については、例えば、発表原稿などによって評価もでき、具体的に指導も可能である。しかし、「話し方」については、印象や経験に頼らざるを得ず、いたって心もとない。

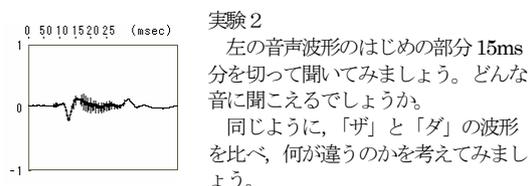
#### (3) 心理的圧迫感

スピーチなどの緊張した場面で、適切な発声や速度などについて、いくらその場で指導しようとも、落ち着いて自覚できるものではない。それでは場数を踏むたびに、苦手意識だけが増すことにもなりかねない。少なくとも、基礎学習においては、楽しみながらできる活動などを取り入れ、理解させていく工夫が必要であろう。

### 2. 実践校の取り組み

#### (1) 奈良女子大学文学部附属中等教育学校の実践

中学校3年生「国語総合」4単位中2単位（今年度より1単位）で、前期を音声表現の指導に当てており、自作の音声教材・テキスト（『表現する、日本語』）を用い、市販のソフトによる音声分析なども取り入れている。音声言語に関する科学的な知見を踏まえたこのような実践は他に類を見ない。



図表1 子音に関する学習の一例（『表現する、日本語』より）

音声言語そのものを教材化、対象化し、ふだんは意識しない音声言語の特徴を実験データや体験から理解させることは、態度や印象というレベルにとどまりがちな音声言語指導の一つの新しい方向性として注目に値する。

### （2）東京都立世田谷泉高等学校の実践

「話すこと・聞くこと」の指導を、言葉によって人間関係を開く、コミュニケーション能力の育成という観点からアプローチしたものとして「日本語コミュニケーション実践」がある。前期を「話すこと・聞くこと」スピーチ実践にあてているが、その特徴は、エンカウンターの実習・信頼実習、傾聴訓練などを多く取り入れ、人間関係の形成体験を十分に行ってからパブリックスピーチを行うという点にある。

「話し手」と「聞き手」の双方のかかわり合いこそが、音声言語活動を成り立たせていることに気づかせる上で、有効な手立てであると思われる。

### 3. 在籍校の生徒の現状

今年度5月、3年「国語表現」の一講座でスピーチ活動の様子を参観した。聞き手を見て話そうとしているのはわずかに1名。終始原稿に視線を落とし、読み上げる姿が目についた。聞き手に伝えようという意識が見られないのである。

8月には、就職希望者対象に、同窓会による模擬面接があったが、「声が小さく、覇気がない」「受け答えが小さい」など、生徒の声に関する指摘が面接担当者からあがっていた。

そこで、9月に、人前で話すことや音声言語の基礎的技能に関して生徒の意識を探ることを目的に、3年「国語表現I」選択者（189名）を対象に調査を行った。

ほとんどの生徒が人前で話すことに苦手意識を持っており、うち6割以上の生徒が「人前では恥

ずかしい」「上手に話せない」を理由としている。

### 4. 基礎的技能の指導の方向性（3つの留意点）

指導上の課題、実践校の取り組み、生徒の現状を踏まえ、次の3点に留意して指導内容・方法を検討した。

#### （1）取り立てた指導

その場限りの指導という現状を踏まえ、指導事項および学習目的を明確にするために、基礎的技能を取り立て、小単元化した授業計画を立てる。

#### （2）実感ある学習

指導にあたっては、単なる知識の注入あるいは印象的な学習に偏らぬよう、実際の音声のできるだけ教材として扱う。科学的データの提示も客観的な指標として、専門的にならない範囲で活用を考える。

また、音声言語の学習においては、実際に声を出させ、生徒の身体性を喚起することが大切である。構成的グループエンカウンターや演劇指導などに手がかりを求め、その手法を取り入れた学習活動を試みたい。

#### （3）メディア活用

話すことに苦手意識、心理的抵抗感を持つ生徒を乗せることはなかなか難しい。日常的で自覚しにくい要素でもあるゆえに、生徒の学習感も低い。学習に対する生徒の興味を喚起し、意欲を持たせる指導のあり方が求められる。メディアの活用は、その面での効果が期待できる。

### 5. 5つの基礎的技能

学習指導要領および文献、先行研究を参考に、基礎的技能に関する指導事項を5つに整理した。

#### （1）組み立て

双括型・ナンバリング・ラベリング

#### （2）非言語コミュニケーション（周辺言語）

速度・間の取り方・イントネーション など

#### （3）非言語コミュニケーション（身体言語）

視線・相づち・体の向き など

#### （4）発音

音韻（母音・子音・拍）・口形・無声化 など

#### （5）発声

姿勢・呼吸・声量

### 6. 授業実践と結果

10月27日から11月18日まで、3年「国語表現I」（23名）において実践授業を行った。単元計画としては、基礎的技能の学習を踏まえて、発表活動を行うという流れにした。

#### 第一次 基礎的技能の学習

1時 導入（学習計画・学習目標の確認）

2時	組み立て	} 5ユニットの小単元
3時	周辺言語	
4時	身体言語	
5時	発音	
6時	発声	
第二次	発表学習「金商デパート魅力再発見」	
1時	発表準備	
2時	発表準備	
3時	発表（相互評価）	
4時	発表（相互評価）	

図表2 「よりよい話し手を目指して」単元計画

### (1) 組み立て

双括型の組み立て、およびナンバリング・ラベリングの活用の学習である。

音声言語は消えてなくなるため、その場で理解できるように話すことが大切である。聞き手に見通しを持たせるために「何の話か」「結論は何か」をまず示すこと、次に項目に分けて話すこと、最後に結論をもう一度繰り返すことといった、「双括型」の組み立てが有効であることを理解させる。

まず、話す時に、どんな順序で情報を出せばいいかを考えさせるため、ピクチャーゲームを行った。説明役の生徒が、教師の示した課題（図形）を口頭で説明し、他の生徒は聞き取って用紙に描く。答え合わせをし、録音した音声を聞きながら、説明を振り返る。その後、双括型の組み立てを図表によって提示し、学習事項を整理した。後半は、学習事項の定着を図るため、課題文を双括型に書き改め発表するという演習を行った。ワークシートから、課題については、21名中18名がおおむね達成できていた。

### (2) 速度と間

話す速度の具体的な目安を知るとともに、間の効果について考える学習である。音声教材として次のものを使用した。①～③は、ラジオから60秒分の音声を取りあげた自作教材である。

- ①野球中継（NHKラジオ、阪神・巨人戦）400字
- ②6時のニュース（NHKラジオ）345字
- ③講義（NHKラジオ、NHKアナウンサーの「はなす・きく・よむ」）225字
- ④CD-ROM『声の曼荼羅 語りとコミュニケーション』（メディア教育開発センター2003）

まず、原稿を読む速度の実験を行った。ペアで読み手と計時係に分かれ、教材③の原稿を、普通に読むのにかかった時間を記録させた。実際は60秒分の音声だが、全員が速く、最も速い生徒は35秒であった。これが60秒分の音声であるこ

とを知らせ、次に教材①、②を再現させた。今度は情報量が多い分、60秒以内で読めた生徒は少なかった。そこで、教材①～③の文字数を伝え、1分間の理想的な原稿量が250～300字程度であることを理解させた。

教材③の特徴は、「間」を十分に取って話していることである。そこに気づかせた上で、後半は「間」の役割について考えさせた。教材④のコンテンツを活用し、小学生とプロの朗読や、人工的に「間」をカットした音声と元の音声などを聞き比べることで、「間」が聞き手の理解を助けることを理解させた。授業後の感想から、実際の音声を教材とし、話す速度の具体的な目安を示すことで、生徒は自分のあり方を客観的に振り返ることができたようだ。

### (3) 視線・相づち

視線・相づちの効果を、ロールプレイやアイコンタクトのワークで理解させようとした授業である。最もねらいとするところは相互交流の大切さへの「気づき」である。スピーチや発表も、話し手と聞き手とが互いに向き合い、関わり合おうとしてこそ成り立つものであることを実感させたいと考えた。開始時間が遅れるなどの諸事情から、ロールプレイのみの実施となった。

構成的グループエンカウンターエクササイズを取り入れ、ペアで効果的な聞き方のロールプレイを行った。話し手と聞き手に分かれ、話し手はテーマに沿った内容で話し（1分）、聞き手は次の二通りの聞き方を演じる。

- 1回目）視線を合わさず無反応で聞く
  - 2回目）視線を合わせて相づちを打ちながら聞く
- エクササイズのリーダーとしてのスキル不足も感じた実践だったが、ワークシートからは、ほぼ全員から、「視線」「相づち」の効果に対する「気づき」が読み取れた。

### (4) 発音

実践校の取り組みを参考に、市販のCD-ROM（『英語スピーキング科学的上達法』ATR人間情報通信研究所1999）などを活用して行った。

ペアで、声を出さずに口形のみで何の母音かを当て合う演習や、CDのコンテンツにある、母音発音時の口の中のMRI画像や母音四辺形の図の提示などを通して、母音の発音に大切な口形や舌の動きを確認させた。また、早口ことばの「どこで間違いやすいか」を問うた上で、なぜ間違えるのかについて、子音の発音には舌の動きが大きく

関わることから、早口な話し方では発音が阻害されることを説明した。

メディアを活用したデータや画像の提示は、やはり生徒の関心をひき、単なる発音練習とは違った学習を展開できた。ただ、技能の学習というより、知識・理解が中心のような印象の授業となり、課題を残した。

### (5) 発声

呼吸が声のエネルギーであることを理解し、よりよい発声のしかたについて練習する授業である。

まず、声のエネルギーが「吐く息＝呼気」であることを理解させた上で、十分な呼気を、コントロールしながら出すための呼吸のしかた（腹式呼吸）について練習した。

次に、相手に届く声を出せるよう、演劇指導の活動を取り入れ、話しかけのレッスンを行った。

ペアで向かい合い、一方が声を掛け、聞き手は声が「届いた」と感じたら反応する。これを徐々に距離を離しながら行う。

また、教室の左手、正面、右手に、後ろ向きに3人の生徒を立たせ、数m離れたところからそのうちの1名に向かって呼びかける。立っている生徒は、自分が呼ばれたと思ったら手を挙げて反応する。

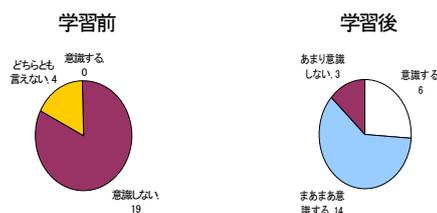
学習後の感想では、半数以上の14名が顔の向きの大切さ（声の方向性）について触れており、「顔を上げて相手を見る」ことは、相手に伝える技術であり、見栄えだけの問題ではないことを理解できたようだ。

### (6) 発表

基礎的技能的学習を踏まえて、実践の場として発表（プレゼンテーション）を行った。事前に資料集めを課題としておいたが、それをもとに、2時間かけて原稿作りなど発表の準備をした。なお、今回は時数の制約もあり、ペアで準備・発表という形にした。当日は、自己評価および相互評価を取り入れ、評価の観点を共有するとともに、自己のあり様をきちんと振り返る機会を持たせた。

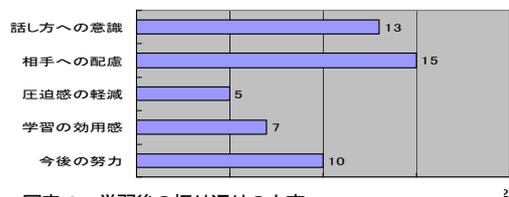
発表では、半数の生徒に、文末で視線を聞き手に向ける、声がよく出ているなどの変容が見られた。もう半数の生徒には、依然、最後まで視線を落として原稿を読むなど、取り立てて変容は認められなかったものの、何とか前を見ようというしぐさが垣間見えるなど、意識の感じられる者もいた。また、11班のうち8班で、双括型を意識した組み立てとなっており、学習が生かされていた。

## 7. 授業実践の成果



図表3 自分の話し方に対する意識の変化

基礎的技能的学習は、生徒に、自分の音声言語のあり方を意識させるものとなった。大切なのは、それが何のためなのか理解させることである。すなわち、「相手」によりよく伝えるために自分を省みるのであり、そのための基礎的技能的なのである。振り返りの感想にも、「相手」「聞き手」「意識」「立場」「考えて」などの語が多く用いられており、「相手」に対する意識の高まりが読み取れた。



図表4 学習後の振り返りの内容

5月のスピーチで、終始原稿用紙に視線を落とし、ぼそぼそと話していたある生徒は、今回、文末では聞き手に視線を向け間を取っており、声もよく出ている。自分の話し方への自覚、および「相手」意識の高まりが、行動の変容につながったものと考えられる。

ただ、全体として、教師側の思いほどには行動変容は少なく、発表準備の時間が足りなかったことなど、基礎的技能的学習が、目指す言語活動に効果的に結びつく展開の工夫が課題として残った。

## IV 結論

本研究は、基礎的技能的指導によって、自分の話し方を省み、「相手」によりよく伝えようと努める意識の向上を目指した。その結果、以下のことが明らかとなった。

(1) 言語事項を中心とした基礎的技能的取り立て指導は、音声言語に対する生徒の興味を喚起し、自己のあり方を振り返らせる手段として有効であった。

(2) 単なる知識の注入としてではなく、実感ある学習活動を伴った基礎的技能的指導は、「相手」の身になって話すこと、聞くことの大切さを生徒に意識づける手段として有効であった。